

日時 令和6年3月22日（金曜日）15時から17時30分まで

場所 大阪府咲洲庁舎 41階会議室

出席者 委員（◎部会長、○部会長代理）

伊藤 央二	中京大学スポーツ科学部准教授
大前 千代子	大阪車いすテニス協会 会長
○富山 浩三	大阪体育大学 体育学部 教授 学長補佐
春名 秀子	桃山学院教育大学 人間教育学部 人間教育学科 講師
◎比嘉 悟	近畿医療専門学校 副校長
オブザーバー	
板越 善則	大阪市経済戦略局スポーツ部スポーツ課担当係長
東 潤一	大阪商工会議所理事・産業部スポーツ産業振興担当課長
八尾 元気	公益財団法人大阪観光局経営企画室スポーツツーリズム担当係長

1 開会

■事務局 部会委員の二分の一以上が出席し、部会運営要領第4第2号に規定する定足数を満たし、会議が有効に成立していることを報告

2 挨拶

○府民文化部文化・スポーツ室スポーツ振興課長挨拶

3 議事

(1) 議題1 部会長代理の指名

■事務局 資料2-1、2-2により部会の設置、運営要領について説明

○部会長から、富山委員を部会長代理に指名

(2) 議題2 第3次大阪府スポーツ推進計画の進捗管理について

■事務局 資料3により諮問について、資料4により計画見直しスケジュール（案）について、資料5-1、5-2により令和4、5年度の進捗状況について説明

部会長）説明の中で、事務局に確認や質問があればどうぞ。

委員）安定的な財源の確保が課題とあるが、府の予算ではなくて、外部予算を取って行っているからという意味か、または別の意味か。

事務局）例えば「いのち輝くスポーツプロジェクト事業」は、令和5年度については府と大阪市が実施している事業ではあるが、府は単年度予算となっているので、長期的な計画が立てづらいというところで、安定的な財源が確保できれば事業の裾野が広がるということ。

委員）大事なポイントなので、ぜひお願いします。

ICTを活用した体力向上について説明があったが、資料5-2の2ページの「ICT活用による子ども体力向上事業」は、独自のスポーツテストを実施しているということか。具体的にどのようなことをしているのか。

事務局）「府独自のスポーツテスト」と記載しているが、内容は小学5年生と中学2年生が実施しているスポーツテストと同じ8種目の結果に加えて、府で重要視している全9問の質問事項を学習支援システムで回答してもらっている。質問は、例えば「運動をすることが好きである」や、「体育の授業は楽しい」など。

また、全国の体力テストは1学期にテストを行って、12月に結果が出るが、結果を反映した授業の改善というのが、時間的に難しい。そこで、府では、7月に終わった体力テストの結果を生徒が学習支援システムに入力することで、各校の集計・分析や平均値の割り出しを行い、2学期からの授業改善に活かしているところ。

また、テストをする前に、先生方で計画を立ててもらい、その結果を見て、2学期からの授業計画を新たに立てて、授業改善に取り組んでいる。

委員）データを国の回答を待たないで、独自に入力をして、それを基に早急に授業改善に取り組んで

いったというニュアンスか。

事務局) そのとおり。

委員) これは、取り組んだ市町村は、「やります」と手が挙がったところとやるということか。

事務局) 大阪市と堺市も含めた府内すべての市町村で実施している。

委員) 我々も、「大阪府の子どもの体力をどうしたら高められるか」という質問を受けた際に、頭を悩ますことが多くあるので、質問した。

次に、ねんりんピックへの派遣は、府が費用を負担して派遣しているのか。

事務局) 費用の一部は府が負担、あとは参加者の方が負担という形で実施しているので、全て負担しているわけではない。

委員) 競技力がある程度高い人には補助金を出しているけれど、そうでないレベルの人には出していないということか。

事務局) そのような形ではなく、競技力関係なく参加する全ての方に1泊分の宿泊費や、往路の交通費、ユニフォーム代という風に、同額で補助をしている。

委員) 「もっと派遣者を増やしてほしい」と声があがっているが、「行きましょう」という人が、なかなか集まっていないということか。

事務局) そのとおり。ねんりんピックの周知不足ということもあるし、競技団体のほうで、独自で選考会を開いて、ねんりんピックのために大会をやって選考をするというのがなかなか難しいという意見もある。他の大会と選考会を合体させて開いてもらったり、こちらも柔軟に対応しているところ。

委員) では、ある程度選考会を経て、競技団体のほうで選んでいるということか。

事務局) そのとおり。要綱で、「予選会を実施するなどして参加者を決定する」と定めているので、競技団体のほうで選んでもらっている。

委員) マスターズ大会のようなところに、府内の大会としてうまくつながっていくとより良くなると思われる。

事務局) 大会に限らず、継続した運動機会の創出というところにも取り組んでいければと思っている。

部会長) 他の委員から意見・質問等ないか。

委員) 全国障がい者スポーツ大会、これは国体のことを指してるという理解で良いか。

事務局) そのとおり。

委員) この国体は、毎年あると思うが、選手として新しく参加される方は、どのぐらいの割合でいるのか。毎年出ている方もいると思うが、全く初めてという方の割合はどのくらいか。

事務局) 正確な数は集計していないが、3割程度の方が新しく入っていて、あとの7割が過去に参加された経験があるというところ。

委員) 今は何回も出られるのか。昔は1回だけしか出られなかったとか、そういう記憶があるが。

事務局) 各政令指定都市や都道府県が代表チームとなるが、それぞれで規定を決めていて、府では回数制限は設けておらず、新しい方も積極的に出られるような選考の仕方というか、そこも考慮して選考している。

委員) 承知した。

委員) 資料5-2の9ページで、「OSAKA SPORTS PROJECT 推進事業」でサイクリングルートを作ったという部分で、スポーツチームと連携したサイクリングルートというのが、いったいどういったものなのかと、課題として、「今年度構築したルートを活用して」と書いているが、ルートを増やしていくということなのか。

事務局) 今年度は国費を使って、大阪スポーツコミッションの構成チームの3箇所、吹田市、東大阪市、堺市の3ルートを作っている。

吹田市では、ガンバ大阪のパナソニックスタジアムがあるので、その周辺のゆかりのある施設などを巡ってもらい、スタジアムまで行ってもらうなどのルートを設定。

東大阪市については、花園ラグビー場を拠点として、神社や公園などを巡ってもらうルートになっている。

堺市については、堺ブレイザーズというバレーボールチームがあり、大浜だいしんアリーナ

の体育館を利用しているので、その周辺、お寺であるとか、「さかい利晶の杜」などの周辺を巡るルートとなっている。

この事業については、来年度も引き続き国費を要求していこうと思っており、拡充とあわせて、このルートを使ったイベント等を企画したいと思っている。

委員) 何人ぐらいが利用したなどは分からないか。

事務局) 今年度はまだ作っただけである。来年度から使っていこうと考えている。

委員) 承知した。

(3) 議題3 第3次大阪府スポーツ推進計画の見直しについて

部会長) 次に、「議題3 第3次大阪府スポーツ推進計画の見直し」に移りたいと思う。事務局より説明願う。

■事務局 資料6により第3次スポーツ推進計画【中間見直しのポイント(案)】について、資料7により学校部活動と地域クラブ活動における取組みについて説明

委員) 推進計画見直しの三つのポイントを示しもらい、このポイントを中心に計画の見直しを進めたいということで理解した。部活動については、今、進捗状況があるので、①のところについて説明いただいたと。また、②と③についても、今後、鋭意内容を検討していくという、そういう位置付けで良いか。

事務局) そのとおり。

委員) ②と③のポイントを示してもらったので、私たちも焦点が絞りやすくなってきたと思う。

これに基づきながら、③を参考指標にするか、K P Iとして具体的な数値目標にするかというところ。ここに示されている指標は、各事業の目的から落とし込まれたものとなっているかと思われるので、例えば、SNSのフォロワー数を増やすということを指標にするならば、SNSのフォロワー数を増やすための努力をしないといけないのかなと思う。

でも、直接的でSNSのフォロワー数を目的として何かやっているわけではなく、いろいろなことをやって、結果としてこうなれば良いなということで、現状は参考指標ということになっていると思う。

「じゃ、今後は」ということで、事業が固まってきたら、そこから落とし込んで、具体的な数値目標を立てるというのもあるのかなとも思うが、いずれにしても、もう少し連携を取って内容を反映しているような、そんな数値指標があるといいと感じた。

部会長) 委員のほうから、そういう指標の要望というか、今後考えてほしいということも、今、話が出たので、よろしく願います。

委員) 事務局からの部活動の件で、指導者として求められている形として、部活動指導員があるが、学校の中に入ってくる方の状況はよく理解できるが、地域へ移行するその内容については、例えば、先生の関わり方とか、生徒の移動とか、あと保護者との連携とか、自身の経験では少し見えにくいところがあるので、説明願う。

やはり学校の中に部活動指導員として入ってこられるということについては、学校としては指導員の顔も見えるし、顧問の先生方も自分には行けないけれども、そのときに指導される方とメニューの相談とか、大会の目標とか子どもの顔を見ながらいろいろ関わっていけると思うが、その辺はどのような感じになっているのか。

事務局) 部活動指導員については、平成29年度に国が学校職員として位置付けるように政令を変え、教員の負担軽減、働き方改革の一環ということで大阪府においては、平成30年度から事業として取り入れたところ。

先ほども説明したように、単独での引率ができるということで、基本的には顧問の先生に代わって部活動指導をやってもらうというような内容になっている。

部活動指導員が、学校と関わりのない外部の人であれば、学校の状況が分からないということは、いろいろな問題が出てくる可能性もあるので、学校の中で顧問の先生と連携を取りながら、メニューや目標のすり合わせなどは必要になってくる。

部活動指導員と顧問の先生が、部活動の状況を含めて、どこまで役割分担をするかというのは、学校の中で話し合うことになっている。府立高校でも部活動指導員は導入しているが、だ

いたい非常勤講師をやっている若い先生が部活動指導員になったり、退職された先生が部活動指導員になったりするケースが多い。

結局、学校としても知っている先生、知っている人に指導してもらうほうが安心して任せることができる状況。

委員) 地域クラブ活動はどうか。

事務局) 地域クラブ活動については、今、国が部活動を地域に移行させるというような話であり、総合型地域スポーツクラブなど受け皿としてはいろいろな団体が想定されているが、総じて「地域クラブ活動」と呼んでいる。

府内5市で今、休日の地域移行という形で継続的に実施するための実証事業をおこなっている。

地域クラブ活動と言っても、一例を挙げると、守口市ではスポーツ少年団としてのサッカークラブが、小学生を対象にサッカーを教えている。その小学生が中学校に進級したら、中学校のサッカー部はあるが、技術指導をできる先生がいないという状況。

では、小学校のときに教えてもらっていたスポーツ少年団に、そのまま中学校の部活動の受け皿となり、今、実際に見てもらっている状況。

そうすれば、そのスポーツ少年団に入っていた小学生は、中学生に進級しても同じ指導者に教えてもらえるとか、メリットもある。

地域クラブと言っても、民間の団体が入ったりすることもあるが、今、ある程度、市で進めているところは、一定の資格とかを持っている人が入っているような状況もある。

ただ、府で設置した検討会議でも、指導者を多く確保する必要があるだろうと。地域移行をやると思っている市町村も、「そんなに指導できる人は多くいない」という課題も明確となっており、今、人材バンクのような人材確保に向けた体制づくりを構築していく予定である。

誰でもかれでも、指導者を集めたらいいのかというわけでもないので、研修や資格とか、さまざまな部分で整備していかないといけないと思っている。

部会長) 現在取り組んでいる地域クラブも、今までの学校の中の部活動についても今後検討会議を実施して課題として重点的に取り組んでいくということで良いか。

事務局) そのとおり。

委員) 質問というかコメントで、委員のKPIのところでは思ったのが、第3次大阪府スポーツ推進計画で、第3章と第4章の1の柱、2の柱というのがあるが。

1の柱だと、「1 ライフステージに応じた機会の提供」から、「5 スポーツコミッションによる生涯スポーツの推進」までの五つがあって、第4章の2の柱ですと、「1 様々な形のスポーツツーリズムの推進」から、「4 人とまちを活性化するためのスポーツイベントの展開」までとある。

おそらく計画の指標を設定するには、この指標がこれに紐付くというふうにしなないといけない。推進計画そのものを見直すわけではないので、この柱のもとに、それぞれの内容で、どれがどうこの数年で変わったのかというのを見ながら、例えば、「1 ライフステージに応じた機会の提供」だと、こういうKPI、もしくは参考指標なのか分からないが、「こういう項目が必要」と。そこから、委員からもあったとおり、「だから、こういうことをしていこう」というふうにつなげていかないと、スポーツ推進計画との整合性がなくなってしまうと思うので、③の指標は、どちらかというところ、1の柱と2の柱に当てはめながら整理していくといいのかなと思った。

「②新たなスポーツなど、スポーツを取り巻く状況の反映」も、やはりこの二つの柱のそれぞれの項目に合わせて、この数年で、どれがどう変わったのかというところを考えていくといいのかなと思った。

部会長) 承知した。

○各委員から、専門分野等をもとに、計画の中間見直しに向けた意見を述べ、意見交換

委員) 私からは、主にスポーツツーリズムの点から、現在、どういったふうにスポーツツーリズムが推進されているのかというところを説明しながら、大阪都市魅力創造戦略や、大阪府スポーツ推進計画の見直しに関連するところを説明させていただきたい。

まず、最初の参考資料3「第二期スポーツ未来開拓会議 中間報告（概要版）」というものがある。内容について、ポイントだけ話をさせていただく。

3ページ、第二期スポーツ未来開拓会議というものはどういうものかということ、3ページに書いているが、スポーツ庁と経済産業省が、スポーツ産業を成長産業化させようということで始まった会議で、第一期スポーツ未来開拓会議では、「市場規模 15 兆円に拡大していきましょう」というところが、センセーショナルな見出しで報道にも上がったところ。

昨年、第二期スポーツ未来開拓会議が始まって、7月に中間報告が出た。そこでスポーツツーリズムが取り上げられて、私も委員を務めさせていただいた。

スポーツツーリズムに関して言うと、15 ページで、スポーツツーリズムの活性化：方向性、具体的取組みというところがある。

上で三つ箇条書きがあるが、まずは一つ目で、訪日外国人（インバウンド）を誘客するためにスポーツツーリズムを使おうというところで、これまでスポーツ庁が力を入れてきたアウトドアスポーツツーリズム、そして、武道ツーリズム、これは、大阪体育大学さんでも、かなり力を入れて進められているが、その二つを引き続き進めていこうというところが確認された。

もう一つは、インバウンドだけではなく、国内日本人のスポーツツーリズムもしっかり進めていこうというところで、海外では、やはりスポーツツーリズムという、サッカーの試合とか野球の試合を見るような観戦型のスポーツツーリズムがメインなので、日本でも、プロスポーツチームのリーグがたくさんあるとおりに、こういった観戦型のアウェイトーリズムといったものを推進していこうというところが挙げられた。

やはりスポーツツーリズムになると、アウェイトーリズムとあるとおりに、ホームファンになると地域住民になってしまうので、正直、ツーリズムではない。もちろんマイクロツーリズムの「域内観光」という言葉もあるが域内で人が動くというだけになってしまう。

メインのツーリズムという、どうやって域外から人を持ってくるか、呼んでくるかというところで、やはりスポーツの試合になると、アウェイのファン、そういった観戦者をターゲットにスポーツツーリズムを推進しようというところで、アウェイトーリズムになった。これを、スポーツ庁、経済産業省で進めていこうという方向になっている。

そこから、未来開拓会議と同様に、次の参考4「我が国の文化芸術コンテンツ・スポーツ産業の海外展開促進事業」というところでも、観戦型スポーツツーリズムを活かしていこうと。

最近では、観光庁もそうだが、やはりインバウンドをしっかり取り込んでいかなければいけないということで、この資料にある経済産業省の補正予算のところの左下の事業概要の2番、スポーツコンテンツの海外展開支援をしていこうというところで、経済産業省でお金が付いた。

これは、どういうことかということ、Jリーグとかプロ野球とか、そういったところにもっと海外進出をしてもらおうと。特に東アジアのアジア圏の地域にどんどん出て行ってもらおうというところで、スポーツリーグ・クラブ等による映像コンテンツといったものを、海外需要創出拡大にどんどん出て行きましょうというところで、海外プロモーションをしよう、そして、インバウンドツーリストの観戦需要を高め、呼び込もうというような事業である。

こちらは、冒頭に事務局からの説明にいろいろあったとおりに、大阪スポーツコミッションのやっている活動とかなりリンクがあるというところで、大阪スポーツコミッションのスポーツ観戦者数を増やそうということと、大阪都市魅力創造戦略でもそういった活動が入っている。

なので、国の流れと大阪スポーツコミッション、大阪府のスポーツ推進、観戦型スポーツに関しては、整合性が取れていると言える。

あとは、大阪都市魅力創造戦略でいうと、例えば、大阪マラソンの外国人エントリー者数を増やそうということもあるし、インバウンドの人たちをどうやってスポーツイベントに連れてくるかというところで、スポーツコンテンツの海外展開支援というところも、「するスポーツ」だけではなくて、「みるスポーツ」のところにもインバウンドの人を連れてくるというところで、スポーツを通じた地域活性化につながるのではないかと考えられる。

あと、もう一つ、大阪都市魅力創造戦略の概要が資料で配られているが、参考資料2の右側の重点取組で、「大阪都市魅力創造戦略でスポーツツーリズムの推進」というものが挙げられている。これは、先ほど言っていた、「在阪スポーツチームとの連携等によるスポーツツーリ

ズムの推進」というところで、スポーツ庁のスポーツツーリズムの推進とマッチしている。

この中で、ここには書いてはいないが、最新の主な取組みでいうと「スポーツチームと連携した万博機運醸成事業」などがあるし、こちらにある「大規模スポーツイベントの開催」、大阪マラソンも入っているが、こういったところともつながっているというところがわかると思う。

あと、もう一つ、大阪都市魅力創造戦略では「大阪のいち輝くスポーツプロジェクト」というところで、万博にも関連しながらアーバンスポーツを使ってスポーツツーリズムを推進しようといったことも行っている。

スポーツ庁もアーバンスポーツを進めていこうとなっているが、なかなかスポーツツーリズムとして、どういうふうにするかというところが難しいと考える。

今年度、スポーツ庁の「スポーツツーリズムコンテンツ創出事業」というところで、渋谷区でスポーツツーリズムの事業として、アーバンスポーツのコンテンツが採択された。渋谷の音楽フェスにあわせて、大阪出身のブレイクダンサーである SHIGEKIX さんら呼んで、パリのオリンピックでも採用された種目のブレイキン（ブレイクダンス）のイベントを行った。

結局は、それが、スポーツツーリズムとしてどの程度うまく機能したのかというのは不明瞭であるが、SHIGEKIX さんらを小学校などに呼んでイベントを行い、アーバンスポーツの推進にもつなげることができたことは良かった。

では、府のスポーツ推進計画を考えるうえで、どういうふうにするかというところを、しっかりモニタリングしなければいけないのかと考えている。

最後のポイントで、参考6「令和5年度スポーツの実施状況等に関する世論調査」の中で、これは本当に最近出たスポーツ庁の、要はスポーツ実施率の報告となる。こちらの質問項目の見直しにも、私は関わらせていただいた。

内容的にはまず、最初の「1 スポーツ実施率について」というところで、20歳以上の週1日以上運動・スポーツ実施率が52%で、前年度から0.3ポイント減でしたというところで、あまり変わらなかったというところが、一つ、大きな結果かと思う。私たちが項目を考えているときに思ったのが、去年、コロナが5類に移行したので、「スポーツ実施率は高まる」という予想をしていたのですが、実は変わらなかった。その理由を、上がったにしろ、下がったにしろ、変わらないにしろ、どういう理由でそういう変化になったのかを知りたいというところで、「実際にコロナが5類に移行してからスポーツ実施率は変わりましたか」みたいな項目も聞いた。

そこで、「全く影響していない」とか、「わからない」と答えた人が84.8%いたということで、スポーツ実施率に関しては、これは18歳以上のアンケートなので、先ほど事務局より、子どもは増えたとかがあったような気がするが、18歳以上に関しては、そこまで影響はなかったというところが報告された。

2ページ目、今回、スポーツ庁の方が非常に頑張っていたのが、この図。図の一つ上にあるが、「する」「みる」「ささえる」すべてに参画した者は、日常生活の充実感を感じている割合が高く、幸福感も比較的高いというところで、ここは、細かく数字は出ていないのですが、「する」「みる」「ささえる」の全部に関わっている人が、充実感と幸福感が一番高かった。どれかでも欠けていたら、充実感や幸福感が下がっていくと。もしくは、「する」だけとか、「ささえる」だけとか、「みる」だけとかになると、幸福感と充実感は下がっていくという結果が得られた。

なので、やはり「する」だけではなくて、「みる」とか「ささえる」という、そういったいろいろな視点からスポーツを推進していくことが大切かというところが、ここの結果からわかったかと思う。

あとは、結果の概要には入っていないが、「運動・スポーツを実施する以外に日頃行っている趣味・娯楽は何ですか」という項目も聞いていて、複数回答で尋ねているが、そのなかに、「スマートフォン・家庭用ゲーム機などによるゲーム」というeスポーツに関連しそうな質問項目が入った。

「スマートフォン・家庭用ゲーム機などによるゲーム」というのにチェックされていたのが、

4万人に聞いているうちの7,836人ということで、だいたい2割ぐらいの人がeスポーツというか、「スマートフォン・家庭用ゲーム機などによるゲーム」を行っているということが、この結果から分かった。

部会長) 何か質問事項等あるか。

委員) eスポーツのことを言われていたが、私もeスポーツのことはよく分からないし、やったこともないが、障がいのより重度の方がスポーツを楽しめるきっかけにはなるのかなとは思ったりもするが、そのあたりはどうか。

委員) 先ほどの他の委員とも意見交換をしたが、例えば、高齢者の方々にとって、ARとかVRを使うようなゲームというものが、スポーツの機会になったりするということもあるので、もちろん高齢者の方にとっても、スポーツを行う、促進する非常に大切な機会になるのかなというのを感じている。

部会長) では、次の委員、意見をお願いしたい。

委員) 大阪車いすテニス協会では、一番大きい行事として年に1回、靱テニスセンターで国際車いすテニストーナメントを、木・金・土・日の4日間で開催している。これは、全国から選手がそれぞれ自分で車を運転して来るなり、公共交通機関を使って来るなりして、各々が試合にやって来る。コロナがあって3年ぶりに2022年に再開したが、コロナ以前と変わらず90名近い選手が集まってきた。コロナのときも、テニスは外でできるゲームなので、テニスコートが閉鎖にならない限りは普通にしていたという声を聞いて盛り上がった。あと、協会では普及として体験会とかを年に何回か開催したり、大会期間中に体験会をしたりなど。

あとは、東京オリンピック・パラリンピック以降には学校から、体験会をしてほしいとか、講話をしてほしいとか、そういうような要望が増えて行かせていただいている。

それと、東京オリンピック・パラリンピック以降に感じていることだが、競技団体とか競技者も増えて、ハード面はすごくよくなったなと感じている。

一般の方も、見る、そしてそこで体験したりするというので、障がい者スポーツ・パラスポーツにすごく関心を持っていただいているなというのが、肌で感じているところ。

パラスポーツは、スポーツだけではなく、障がい者の理解や雇用、教育にもすごく大きく影響したなとすごく実感している。

特に感じているのは、共生社会の実現に向けて、ゆっくりなりにも少しずつ、東京オリンピック・パラリンピック以降は育っていったのかなと感じているところ。

そして、先ほども質問をさせていただいたが、eスポーツも私個人としてはよく分からないし、やったこともないし、ゲームだからちょっとスポーツとしては取り入れにくいなというところがある。

だが、重度の障がい者のことを考えると、eスポーツを取り入れて、体験して、一緒に共有できて楽しめるというのはありかなとすごく思っている。

部会長) 何か質問事項等あるか。

委員) 「eスポーツを使うと、対等に勝負ができるのでというところが良い」というふうに言われているが、やはりパラスポーツのことも絶対触れていかなければいけない部分だと思う。ともすれば、何か成果があったとか、指標を設定してこんなところが伸びたとかということを、この計画を立てていく中では考えていかざるを得ない部分というのものもある。

やはり障がいのある人も、スポーツの実施率で目標値ができたりとか、パラスポーツを見に行った人を何パーセントとかという目標が、国でもあったと思う。

今、発表いただいたように、共生社会の実現というところでの視点もあると思うが、パラスポーツでの指標で、このぐらいのことが達成されたというような指標をつくっていくとしたら、どんな指標を入れていくといいのかなと。する人が増えるということがいいことなのか、もっとたくさんの方が体験したほうがいいのか、あるいは見に来てもらうことがすごい大事なことなのか、そのあたりを、感覚的な部分でもいいのですが教えていただきたい。

委員) 障がいのことを理解していただくと思ったら、やはりまず見ていただくということで、そこから入ると思う。見ることによって、障がいのある人を取り巻く環境とか、どういう事情で障がいを負うことになったのかとか、そういうような想像も巡らせることもできると思う。いろ

いろと障がいに関することで想像もできるし、体験をすれば、いろいろな生活の面で創意工夫、こういうことをすれば、障がいを障がいとして思うのではなくて、もっと生活がしやすくなるのではないかと、そういうところも含めて、スポーツを見るところから入ってもらって、想像性が広がって行って、生活面とかにも、不便なところが不便ではなくなっていくような環境に、将来的にはいけるのではないのかなとか、スポーツを通してですが、そういったことを思ったりもしている。

最初は、やはり見ていただくというところから入るのではないかなと思う。

委員) まさにバリアを下げて、一般の人も気軽に見に来てもらえるような環境になればいいという。

委員) そのとおり。見ていただいて、体験していただいたら、よりいいかとは思う。

部会長) では、次の委員、意見をお願いしたい。

委員) 地域活性化という視点でコメントをしたい。「第3期スポーツ基本計画」これは皆さんご覧になっていると思うが、この中では地域活性化というところが、1枚目の右上と、2枚目の地域創生、まちづくりという形で出てくる。地域活性化とかと耳障り良く言われているが、実際どうすることが地域活性化なのかというのは、あまりこれといった定義もないままに、「地域活性化」とか「地方創生」とかいろいろな言葉で語られるかなと思う。

この計画では、「スポーツの楽しさを通じ、人とまちが活性化し、ともに成長する」というようなフレーズが出てくる。

「地域活性化って何だろう」とチャットGPTに聞くと、何となく分かったような分からないような答えが返ってきた。一つは健康を増進させるということと、運動することにより人とのコミュニケーションを増やすということが、人々の地域への愛着だとか、ソーシャルキャピタルとかということにもつながっていくのかなということ、健康増進と人とのネットワークづくりということが、個人的には大事なポイントかと思っている。

「スポーツが地域に存在する価値」というようなことを、最近、こういう形で考えたことがあったが、ここにあるような価値があって特に不使用価値というか、スポーツをしていない人にもスポーツが地域にあることが価値のあるのだということを知っていただくということも、「スポーツをやっている人って50%じゃないの」というふうに言われるが、「いやいや。これがあることで、そうじゃない残りの人たちにも価値があるんだ」ということ。

それは、健康づくりによつての経済的なことだったり、その上にあるようなことも、スポーツをしていない人にもこんな価値が生まれるというようなことも、どこかで考えておくことも必要かなと。

これに、スポーツによる府民の凝集性だとか、地域への愛着というのが、「大阪にいてこんなことがあるんなら、大阪ってよかったよね」と思ってもらえるような環境づくりに資するといいいのかなと思う。

府と市町村との役割分担というか、「ピラミッド型ネットワーク」と書いているが、大阪府知事がトップにいて、全員に指示を出して、府庁内ではそうだと思うが。

その外には、プロチームや大学もあるので、この計画を進めていくためにはネットワーク型で、外部の団体や組織とあるいは市町村も知事の傘下にはないので、そういうところがネットワークを構築しながら進めていくことが重要なのかなと。

今日、事業報告を説明いただいたときも、「様々な団体との連携で進んでいる」という説明がたくさんあってよかったなと思っているが、こういった他団体や、特に市町村との連携を強化していくという視点も重要ではないかなと。

なぜならば、地域活性化だとか生涯スポーツというのは、実際にスポーツをしている人のこと、スポーツをしている人と最前線で関わっているのは、基礎自治体の担当の人たちということになるのかなと思うので、そこと連携して、いろいろなことを進めていくことが重要ではないかなという考え。

一番最後のページでいうと、「こんな計画があるんだよ」ということを、内部だけではなくて、やはり外へどんどん出して行って、「こんな計画ができています」というようなプロモーションというか、知っていただく努力が必要かなということ、で、「庁内連携」、「外部連携」という文言があるが、とりわけ外部連携を進めていくと。さらに進めて行って、SDGsもあるが、

連携で成果を上げていこうという組織連携を進めていくことが大事かなと。

「じゃ、どうやれば」ということだが、例えば、担当者会議とか府の計画をもとにしたセミナーの開催とか、そういうことが多くあってもいいのかなと。それは市民向けというよりも、担当者向け、あるいは組織や団体に所属している人たち向けの共通理解を得るようなことがあってもいいのかなと思う。

今日、見直しに向けた三つの視点をお示しいただいた。三つ目は指標のことだが、これを概要版にあるが、今回の第3次計画にどうやって盛り込んでいくかということが、今日いただいた宿題なのかなと思っている。

とりわけ部活動のことは、前回のところでは、「まだ国の方針も十分ではないので」というところだったと思うが。

その後、今まさに直面する非常に大きな問題なので、章を増やすということにはならないかもしれないが、その中の見出しを一つ一つ、部活動の推進というようなことは取り組んでもいいぐらいのテーマではないかなとも思うし、新たなスポーツを取り組む状況というのは、ここにどう入るかというのを、これから考えていかなければいけないなど。

先ほど委員のお話で、バーチャルはやはり高齢者で、いわゆる認知症の予防だとか防止のためにやっているような事例も全国の自治体でたくさんある、そういう取組みかなとか。

市民運動会を担当することがあって、そこで子どもたちのためにeスポーツをやってみようということで、ゲームを置いたが、全然子どもは来てくれなくて、「こんなん、家でできるから、今、ここでやらんでええわ」と言われたことがある。子どもが列を作って、「家ではやらせてもらえないので、今、やらせて」と言うのではないかなと思ったら、逆で、まさに実感として、今の子どもたちの取り組む環境が分かったなということなのだが、やはりそれよりも、ちょっと年齢の高い方がやってみるとか、そういうことがあると面白いのかなと。

計画は6章あるが、これが一つずつの指標に落とし込まれて、具体的なKPIになっていくと。やはり評価のところでは、数値目標がきちんとあったほうが、きちんと評価ができるということになるので、ある程度KPIを定めておいて、どのぐらい達成できたということは必要だと思う。

あるいは事業計画というのは毎年変わらないので、毎年相変わらず同じことをやっているのではなくて、この中でそれぞれがこんな成果を上げているというようなことも示すためにも、やはり数値目標というか、KPIはある程度あったほうがいいのかなとも思っている。そういう意味では、今後、指標を検討していくことは非常に重要なことかなと。

その他の参考資料として、SNSだとかここにあるようなことはその外にあるものはいいかかなと思うが、数値目標をつくっていくことが大事かなと思った。

大阪マラソンは、琵琶湖マラソンと合体して非常に良いが、その影で泉州国際マラソンはなくなってしまったというか、時期が同じになったので、そういうこともある。

だから、そういうネットワークみたいなものがうまく働くと、「いやいや。そこじゃなくて、じゃ、こうしよう」とみたいなことが、府内でうまく進んでいけば良いし、やはり府の計画としては、能勢町から岬町まで目配せをしながら進めていくということも必要なかなとも思うので、そんな視点もあったらいいのかなと思った。

部会長) 何か質問事項等あるか。

先ほどの説明にもあったが、国の計画ではスポーツによる地方創生やまちづくりがクローズアップされている。そして、コロナ後のスポーツの地域との関わりについて、どのように考えておられるか。

委員) 他の委員からも話があったように、コロナが終わったら伸びるかなと思ったら、あまり伸びていないのだと伺って、「なるほど。そういうものなのかな」というふうにも感じた。

終わってみれば、もうすっかり何もなかったかのように元に戻ってしまうのかなとも思うが、健康意識が高まっているということであれば、これが一つの機会かなと。ただ、個人的にはあまりスポーツが健康の方になってしまうのもどうかなと思うので、やはりこの計画のエンジョイとか楽しみとか、そちらのほうがあるので、ぜひまたそこが活性化して、地域の活性化につながっていけばなと考えている。

部会長) では、次の委員、意見をお願いしたい。

委員) 前回の会議のときは、熱い気持ちで部活動のことをいろいろ語らせてもらったが、大学に行って教師を育てるという場面が増えてくるという実態の中で、部活動についての組織づくりや体制が変わったということで、自分も勉強をしてきたなという気がする。

中学校の先生に、いろいろと現状を聞く機会があったので、部活動についていろいろ聞いてみたが、やはりスポーツの二極化が、思ったよりもすごく進んでいる。小さいときからやっているスポーツの習い事、そういうものが中学校に行っても、部活としてサッカーや野球が多いのだろうが、中学校に入っても、元々やっていた先ほどの地域クラブの体制でクラブチームのほうに所属して、中学校の部活動には所属しないということで、部活動は初心者が多いのだということを聞いた。そこに毎日関わる顧問は、最初のスキルの指導というのがなかなかできないと。また、今まで経験者であったリーダーシップを取れるメンバーもいないことで、やはり専門のスキルを持った方の指導というのは必要だという声は切実であった。

しかし、5時を過ぎればグラウンドは閑散としている状況で、クラブ指針の内容を緩やかに守りつつ、クラブとしては顧問の実態に合わせて、休日も少し長めにやるとか、いろいろな体制はあるらしいが、中学生の部活動の内容というのが少し変わってきているということは聞いた。

できれば部活動のいいところを活性化し、できるだけ衰退を止めるというようなことは大事かと思うので、事務局から分かりやすく示してもらった内容が確実に進めていってもらえればいいと思う。

また学生のほうからいくと、インターシップを2年生で経験して、そのまま自分が関わっていた中学校にスクールサポーターであるとか、クラブ指導員でまた行くというようなことも、人材バンクに登録してそこからインターシップで関わった学校にまた行くことができ、深い関わりを持ってできたら教員になる希望のある人は、できるだけ頑張っ採用試験まで気持ちをつないでほしいと思う。

そういう形で、うちの大学は結構人数も少ないが、アットホームな形で特にスクールサポーターとかで学校に入った子たちは、学校の先生の仕事がすごく理解できたとか、すごいやりがいがあると。それから、部活指導員としても子どもたちと関わりが深いのですごく楽しいと、そういう経験値を持って採用試験に臨むということも聞いており、すごい貴重な経験かなと思う。

あと、退職してしばらく孫を見ていたけれど、孫も大きくなったのでということで、小学校や中学校のほうにクラブ指導員で行かれている先生もいらっしゃる。どの方もおっしゃるのは、私が心配していたより顧問の先生と外部指導員の連携をすごく取っておられて、先生方も忙しいけれど、部活動をしてもらっているというときには必ず顔を出してコミュニケーションを取っておられると。

退職された先生に「どんなことに一番気を遣っていますか」ということを聞いたら、やはり「生徒の体力が落ちているということと、また、厳しくやったらやめる」ということ。それから「ちょっと運動をしたいという子が部活に来ているという、そういう子も半数いるので、そういうところの気持ちを大事に関わっていきたい」というようなことをおっしゃっていて。でも、コミュニケーションを取って、顧問の方とうまくやっているというパターンが多いということで、とても安心したというか、そういうことが大事だなとも思った。

地域クラブということで、事務局からお話がありましたけれど、花形のスポーツと、地味なスポーツでは、やはり地味なスポーツが衰退していくというのは残念なこともあるかなというところで、ある市の話だが、勤めている中学校の先生が部活動の指導員を申請するやり方が分からないということをおっしゃっていたこともあり、いろいろな中学校の状況があるのだと思うが、先ほどのいろいろなクラブの体験を大事にしていくということは大切だと思う。

また、ある地域の祭りがあったが、それには、「子どもの笑顔日本一をめざす」ということで、子どものための地域のお祭りだった。今回は4年ぶりの開催であったが、小学校という団体で出てきたのはたった1校で、あとは全てシニアの方だった。シニアの方々がすごく元気で、小学校時代は、活気があっていろいろなことに挑戦ができて、好奇心を持って、自分の体を知

る、友達とコミュニケーションを取るということを盛んにされていて、それをいくつになっても大事なものとして持っておられるのかなと思ったので、子どもたちにも、そういうものを持ってほしいなと思った。

部会長)他に何か質問事項等あるか。なければ私から。クラブや地域とかに学生さんが行ってすごくいい面があり、委員から先ほどもいろいろ聞いたが、先生になるための学校で、いろいろな勉強をしながら、クラブを指導するというのが、すごくメリットになるとか、そういうのがあればもう少し教えていただきたいのですけれども。

委員)1回生のときから、模擬授業というのをたくさんする。2回生になって、まずインターシップで関わるようになって、生徒への関わり方とか、言葉掛けを考えるようになったと。模擬授業も、1回生でするよりは、2回生で余裕が出てきた。

3回生でやるときには、自分の授業の内容が、生徒に押しつけているわけではなく、生徒たちの、今の時点ではなくて、少し中長期でどういうふうに育てていきたいかというのを考えながら、授業の内容を考えると、言葉掛けを考えるとというふうなことで、成長しているというのは、本人たちも充実していたし、特に授業を通して感じるがあった。

部局長)先生になるというためにやっていることが、実際クラブ活動にも活かしているということで理解した。他になければ、本日、公務で欠席されている委員からコメントをいただいているので、事務局から紹介をお願いします。

事務局)事務局より、コメントを紹介させていただく。

はじめに、第1回部会に欠席することになり、大変申し訳なく思っている。

大阪マラソンへは、私自身、初回から医療スタッフとして毎回大会に参画しているが、先日の大会では、海外ランナーの参加が急増したことを実感し、彼らに対して、ボランティアスタッフが丁寧に対応している様子を目の当たりにした。

計画策定後の2年間の取組状況を拝見し、これらが AIMS での大阪マラソンの広報などの具体的な成果に裏付けされていることを知るにつれ、計画に基づく施策が確実に進捗していることを大変素晴らしいと感じている。

この度、中間見直しについて、以下の2点コメントさせていただく。

一つ目は、部活動の地域移行について。取組みの大きな柱となる項目だが、その本来の目的は、すべての子どもが自身にとってスポーツの価値を生み出し、日常生活に取り入れることによって余暇の充実や生涯スポーツの獲得につなげているところにあると理解している。日本では、子どものスポーツ実施の場が学校に集中している現状があるが、運動部の試合に勝つレギュラーの部分になじまないために、参加を躊躇する子どもも少なくなく、そのことがスポーツを身近なものに捉える機会を減らしている可能性があると感じている。

そのような背景を踏まえて、スポーツを地域に開き、立場や年代を超えた交流を介して、誰もが体を動かす楽しさを興じできる機会を設けることが重要と考えている。

アーバンスポーツなどは、そのような場になじみやすいと思うが、そのような観点で地域スポーツをファシリテートできる人的リソースを活用するなどの取組みが必要で、結果として、教員の負担軽減につながれば理想的であると考えている。

二つ目は、計画の指標の設定。スポーツ実施率を高めていくためには、先に述べたとおり、個々の価値観に基づいてスポーツを楽しめる環境整備を行い、新たにスポーツを始める人を増やし、スポーツの裾野を広げていく必要がある。

大阪府障がい者スポーツ大会など、各種のスポーツ大会については、参加経験のない方が参加してみたいと思える仕組みを設けて、スポーツ施設についても、延べの利用者だけではなく、新規の利用登録者などについて目標を設定し、そのための取組みを行うことが重要であると考えている。

最後に、この度、厚生労働省も身体活動・運動に係る推奨事項を、「健康づくりのための身体活動・運動ガイド2023」とし、10年ぶりに改定をしている。

従来の「身体活動基準」から「ガイド」と名称が変更されていることが示すとおり、高齢者の介護予防や、慢性疾患を有する方が治療の目的で身体活動を行う場合でも、効果的な正しい動きで、きちんと定められた時間で行うということよりも、個々の準備状況に応じて、何もし

ないよりは、とにかく動くことに重きが置かれている内容となっている。座位時間を減らすことも新たに言及いる。

ARやVRを活用したスポーツは、まだまだ身近で手軽にできるという距離感にはないと思うが、コロナ禍を経て配信される動画を見ながら、自宅で好きな時間にちょっと体を動かすというようなことは、多くの人にとって特別なことではなくなってきたと感じている。

余暇時間の充実や、家族・友人との交流・コミュニケーションなどのツールとして、スポーツは日々根ざしている、府民がそのようなイメージを共有できるよう、SNSなどの様々な媒体が活用されることが望ましいと思う。

部会長) 最後に、私も少しだけ自身のスポーツについて話を。

私は、ずっと部活動をやってきたので、部活動について体験談を少しだけ話させていただきたい。

一つは、東日本大震災が起きたときに、海外のスポーツのコメントで、日本は水の配給をするとき、みんな並んで横入りをする人がいないというようなコメントを聞いた。

私は、高体連の全国の副会長をやっていたので、東北のほうの部活動の加入、それがすぐにピンときた。

東北の方は90%以上部活動に参加している。それが、そういう集団のときに自然に出てくるのかなど。割り込んだりとかをするのではなく。私はそれがすごく感激して、部活動のよさを目の当たりに感じた。

それと、もう一つは、この頃学校でのクラブの加入が少なくなってきたということで、講演を頼まれて、ある府立高校に入ってくる新生生に対して講演をした。

自分も勝ち負けにこだわってやっていたときもあるが、部活動の価値はそれだけではないと。友達ができたりとか、体が元気だったりとか、そういう部活動の勝敗以外のことを話した。

それから、私の教え子の話ですが、夏休みに読書感想文大会をクラブでやっていて、彼が、『塩狩峠』という本を読んで、すごく自分自身、一つの本を読んで変わったと言っていた。私は、『塩狩峠』の内容の、自身を犠牲に大勢の人を救った、という話に感動したと思ったが、違った。

高校2年生で、初めて1冊の本を読み切ったと、それで自分は変わったと。そこから、勉強の平均点が50点から70点に上がり、部活動の成績も大阪の2,000~3,000人いる中の上位にはなれなかったが、国体の補欠と一緒に連れて行っただが、部活動でそれだけ変わった者がいるということ、講演で話した。だから、部活動は私も若い時は勝ち負けにこだわったが、本当に人間的に成長して、友達との人間関係もできて、素晴らしい日本の部活動は世界に誇る文化遺産と、私はいつも話しをしている。

だから、例えば中国とかそういうところは、一流の人ばかりを集めてやる、そんな学校のクラブがある。それから、ヨーロッパの地域とかは、遊びのニュアンスが多い。

だから、日本のクラブ活動は誰でもできて、その中からオリンピックにも出ている。なおかつ、自分自身も人間的に変わる、世界に誇れる文化遺産というように、私はあちこちで講演をするときに話している。今までに部活動をやめさそうと何度か協議会を開催されたが、何とか存続し続けてきた。

そういうことで、日本のクラブ活動は、世界に誇る文化遺産ということを守り通して、これからも、先ほどの中学校の移行についても、一緒に話をしていきたいと思う。

部会長) では、本日の議論を踏まえて、オブザーバーの方にも、少し意見をいただきたい。

まず、コロナ禍において、スポーツイベントの中止・延期等が相次いだところだが、コロナ後の大阪の取組状況、主に今年度の状況はどうだったのかと質問させていただきたい。

オブザーバー) 2類、5類の分類は別で、いつからコロナが終わって平常になったのかというところは、議論が分かれるところだとは思う。令和3年度、コロナが直撃した期間のスポーツに関してのコロナの関連予算でいうと、スポーツ施設を指定管理で委託しているので、そういったところが閉館になっていた期間の営業補償的なところで、コロナの予算が充てられていたというのがある。

そこから、少しずつウィズコロナからポストコロナに移り変わるにあたり、コロナからの脱

却目的としての取組みを行ったのは、どちらかというところ「するスポーツ」ではなく「みるスポーツ」のほうの事業を、令和4年度と令和5年度の2カ年において実施してきた。

具体的には、各種目の様々なプロスポーツがある中で、コロナが直撃した期間は、いわゆる無観客試合と言われるような形で、興行として試合をやっているチーム側も非常に厳しい状況が続いたとは思いますが、市民の側も実際見に行きたくても行けない状況だった。制限が解除された中でも、チームの関係者にお聞きすると、なかなか仲間を誘いづらいため、今まで複数で来ていた方が、単独で来ているという状況が多くて、なかなかお客さんの戻りが悪いということを知っているため、スポーツチームと協力して、まずは、スポーツを観戦するところに立ち戻ってもらおうというところの取組みを実施してきた。

正直、戻りきったというところまではいかない部分があるのと、幸運にもこの数年は特に野球のオリックスが非常に強く、そのせいで観客が戻ってきたところがあるので、われわれの取組みがどこまで効果があったかというところは測りづらい部分もある。

そういった中ではあるがこの取組みを通じて、スポーツチームを媒介にしたスポーツに触れ合うということについては、副次的な効果としてあったとは思っている。

特にプロチームに関しては、各チームがホームタウン活動等も一生懸命されているので、そういったところで、地域に入って行って、普段からスポーツに関わってもらって、試合の日には見に来てもらうというところの好循環を、来年度コロナ関連予算としてはないが、今後も、われわれとしては取り組んでいきたい、今までも取り組んできたので、それを続けていきたい、今のところ思っている。

部会長) 続いて、今後のスポーツ振興にあたって、スポーツ産業の分野で考える中、ほかの産業との連携が重要になってくるのではないかと思います。そうした観点から、産業界から見たスポーツ業界の価値は、どのように捉えているか。よろしく願います。

オブザーバー) コロナ禍で、スポーツのあり方というのがいろいろ変わっていて、一つ、興行として影響を受けたところはある。

逆に、お家でするスポーツとか、ジョギングを始められる方々が増えたということで、スポーツウェアやシューズの売上は結構上がっていて、そういう業界は意外と潤っているというのが一つ。

もう一つは、アプリとかITとの連動ということで、ジムに行けないので家でとか、公園で運動をするというところに見える「WEBGYM」というアプリとか、あと、楽しく体を動かすということで、テトリスというゲームがあるが、あれを、左腕を回すと左回転する、右腕を回すと回転するとか、スクワットの運動をすると1回転するとか、列を揃えるころには、かなりヘトヘトになっているようなアプリがあって、そういうゲームアプリを開発するようなスタートアップ企業なども出てきたりしている。あと、ツール・ド・フランスができなくなって、インターネット上のメタバース空間で、いろいろな国からルームサイクルで参加するようなツール・ド・フランスに参加して、そういうIT系の技術と連動することで、運動する機会を保とうという動きがある。そういうところも、一つ、ヘルスケアだとか、スポーツの実施維持をするようなテクノロジーというのが非常に出てきたという、コロナのいい影響として出てきたのかなと思っている。

もう一つ、企業によるスポーツの活用というのも増えてきていて、健康経営というのは昔からあるが、最近では例えば、ブラインドサッカーなどは、実は企業内のコミュニケーションを醸成するのにとてもいいということで、ブラインドサッカーを企業の方々でやってみたりとか、ゆるスポーツみたいなもの、事業開発を考えるうえで非常に役立つということで、ゆるスポーツをやってみようという方もいたりする。

今後としては、一つ、企業の持たれている課題に人手不足というのが非常に深刻で、採用がなかなかできないというところがある。そういう課題と、アスリートさんのセカンドキャリアの形成というの、もう一つの課題としてあるので、ここをうまくマッチングできないかということで、今、何かしらのマッチングができるような事業がつかれないかというところで企画を進めているところなので、またいろいろご協力をいただきたい。

部会長) では最後に、スポーツツーリズムについての発表があったところだが、国の検討でも、コロ

ナ禍の影響によりスポーツツーリズムなど、当初予定していた施策では、十分に効果を発揮することができないという側面が生じたと言われているが、大阪における状況はどうか。

オブザーバー) 大阪観光局では、簡単に来阪者数でいうと、2014年に376万人、それが、どんどん上がってきて、2019年には1,231万人と、そこを頂点にどんどん上がっていきこうということであったが、コロナの影響もあって、2021年には9万人と、下がってしまって、今、何とか2023年には推計値として993万人、約1,000万人に届く程度まで盛り上がってきたと。

これは、万博を2025年に迎えるので、この勢いを持って大阪を元気にしていくと、大阪の魅力をより多くの方に知ってもらいたいということで、今現在、大阪観光局としても、府内市町村であるとか、もちろん大阪府・大阪市・堺市・大阪商工会議所・経済界とともに、大阪を盛り上げていきこうという流れで現在、進めているところ。

特に、われわれの目標のイメージ図としては、「アジア No.1 の国際観光文化都市」というものを掲げて、その都市のイメージとして八つのキーワードを挙げているが、特にスポーツに関連するものとしては、体験・感動、2番目には元気・活力、具体的には様々なプロスポーツを観戦できる都市である、そういう大阪であるということや、スポーツが盛んで健康と生きがいを楽しめる健康増進都市だと。

「元気」・「活力」というキーワードで、八つのキーワードのうちの二つが、特にスポーツに関連している。

今現在、これだけ落ち込んだ経済をどうやっていくかということの中で、観光の復活を図り、大阪及び日本の復活を図っていくのだと、大阪が牽引していくのだという思いで、取り組んでいる。

いよいよ、これから大阪観光の本格始動を行うということで、今、大阪観光局一丸となって進めているところ。大阪・関西万博を飛躍のきっかけとして、成長を加速させていくのだということで、現在、取組みを進めている。

「ラブ大阪」つまり大阪を愛そうと。それは、翻ってシビックプライドになると、ここに書かれているような愛着と誇りを持った府民を育て、より豊かな人生を過ごせる大阪にしようという、こちらの計画が目指す将来像と、私ども観光行政として進めるまちづくりというのは、まさに重なっているのかなと思っている。

部会長) それでは、オブザーバーの方々の意見に対して、何か質問事項等あるか。なければ、本日の議論はこれまでとさせていただきます。

事務局のほうでは、次回部会での意見交換もあるが、本日の議論を踏まえ、第3次大阪府スポーツ推進計画の中間見直しの骨子案について検討いただければと思う。

以上で、本日の審議を終わらせていただく。円滑な議事運営にご協力いただき、感謝申し上げます。

事務局) 次回の部会は、今年の夏頃に、本日の議論の内容を踏まえ、課題の再整理をしていきたいと思っている。

また、骨子案の作成にも取り掛かっていきたいと思っており、詳しい開催案内については、後日、改めてお知らせする。